編集後記

■本誌第三十九集が編集された今年度は、高等学校において新学習指導要領の告示を受けた「周知・徹底」の年となった。この中で、高等学校の国語科は、その歴史上類を見ない程の「教科・科目」構成の改変を経て、新たな学力観・指導観を問い直す契機を提示された。これに伴い、本誌〈特集〉においても、「変わる高校国語」と題して、五名の先生方に、新学習指導要領の改訂の内実やその意味、指導の工夫点や入試につながる学力観等に関する貴重なご解説・ご提言を頂くことができた。

■また、この新学習指導要領で打ち出された「思考力・判断力・表現力を一層重視した」改訂の方向性は、周知のように、大学入学選抜改革を軸とした高大接続改革と連動している。これにより、二〇二〇年から新たに「大学入学共通テスト」が実施される。この流れを受けて、本誌第四十集では、〈特集〉を「大学入試改革と国語」と設定し、広く原稿を募ることとした。

■学会〈シンポジウム〉を受けた「明治一五〇年 国語の中の漱石」では、二〇一七年に生誕一五〇年を迎えた漱石の「こころ」をとり上げ、四名の先生方から、貴重なご実践に基づくご提案をいただいた。現代の高校生を主体的に作品と対峙させる工夫や、その過程で「説得的な読解や表現の仕方の獲得」を目指した、Google Classroom等を駆使した対話的な学びのデザインのご提案と、いずれも本学会会員に力を与えるご提案をいただくことができた。

■〈実践報告〉では、お二人の先生に、興味深い新たな指導方法のご提案をいただいた。一編は、学習者自身に古典教材を考えさせる取組み、もう一編は、演劇活動を活用した「城の崎にて」のご実践である。これらを含む本誌への投稿〈論文〉は、全て厳正なる査読・修正再査読等の過程を経て掲載を行わせていただいた。また、〈現場から〉では、教科書脚注に丁寧に取り組んだ興味深いご報告や、国内からは高専教育、海外からはタイ王国からのご報告等もお寄せいただけ、本誌執筆・購読層の厚さを実感するものとなった。

■本誌第三十九集は、「平成」最後の本学会機関誌の刊行となる。振り返れば、平成という元号が始まった時期に、人々はパーソナル・コンピュータの一人一台時代に突入し、電子メールを使い始めた。そしてその約三十年後の今年度、本誌のデジタル公開を併せた発刊方法の導入が、本格的に編集委員会でも検討された。紙媒体・電子媒体双方の良い点を有意義に活用して、より広範な読者に、益々役立てていただけるような機関誌となることを心から祈念する。

本誌刊行にあたっては、学会代表である中嶋先生、編集委員の江口先生、甲斐先生、田渕先生、天満先生、松木先生、事務局の稲葉先生、康氏、永瀬氏に、終始ありがたい御助言と御尽力を賜った。ここに、心より御礼を申し上げる。最後に、お忙しい中意義有るご論考をお寄せくださった会員各位に、この場をお借りして改めて心からの御礼を申し上げる。

（奥泉　香）

早稲田大学国語教育研究　第三九集

二〇一九年三月三〇日発行

発行所　早稲田大学国語教育学会

代表　中嶋　隆

東京都新宿区西早稲田一－六－一

早稲田大学教育学部内

振替　〇〇一六〇－一－八五二七番

印刷所　株式会社　研恒社

東京都千代田区九段北一－一－七